

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381015

研究課題名(和文) ナラティブによる探究学習の効果の研究

研究課題名(英文) The narrative study of the effects of the inquiry learning

研究代表者

浅沼 茂 (ASANUMA, Shigeru)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：30184146

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、個々人の主観性において対話の意味がどのように理解され、相互作用のなかで個々人の主観的意味がどのような利害と背景が隠されているのかを探究したものである。特にモノローグ的に理解されがちなナラティブ的な子供たちの述懐はそのままの表現どおりに理解されやすい。それに対して相互理解をめざすナラティブ・アプローチは、話者の主観的な意図と背景について立体的総合的にとらえようとするものである。実際の対話的な授業展開においては、生徒のナラティブが非常に重要であり、一人一人の語りが重要な記録となる。そして他者理解を把握するためにも、それは重要な記録となる。

研究成果の概要(英文)：It is a fundamental structure of human communication to understand other's interpretation through narrative method. The direct disclosure is necessary for our methodology because we get used to the statistical method which stay away from the reality of the students' lives. The emotional rationality is indispensable to understand the individual's real motivation and context of our intension. It is necessary to understand the context and subjectivity of the individual paramount reality. Narrative method is a way to disclose the individual's real meanings. But it is limit to understand how others think about the address initiators. So it is important to attain the transcendental inter-subjectivity to understand the mutuality of addressers. The inter-subjectivity is a basic foundation for human understanding. How do we pursue the mutuality of our understanding others? So it is necessary for our narrative records of dialogue to address the question what others think about the addresser's words.

研究分野：カリキュラム論

キーワード：ナラティブ 相互理解 相互主観性 ダイアローグ 他者理解 自己理解 総合学習

1. 研究開始当初の背景

本研究は、「ナラティブによる探究学習の効果の研究」であり、探究学習の成果を生徒と教師の主観的な述懐によって探究学習に関わる因果関係性によって明らかにするものである。

2011年より実施された学習指導要領における「確かな学力」の中で、基礎・基本、活用型のさらに発展した形として「探究学習」が位置づけられた。それは、総合的な学習の時間において特に、実践されるものとされていた。このような学力観は、基礎・基本の学習だけが、基礎学力に関わるものと考えられている一般的な理解とは異なり、確かな学力を支える重要な柱として位置づけられてきた。それとは異なり、探究学習は確かな学力の中核をなすものとする。総合的な学習の時間は、現行学習指導要領では、発展的探究学習的なものとして位置づけられている。

研究代表者は、かつて総合学習を進めてきたオープンスクールの卒業生の追跡研究を試みてきた。その結果については、『指導と評価』(1999年3月号)、『世界』(2000年5月号)などにおいて紹介してきた。その調査は、学力調査、アンケート調査、そしてインタビュー調査など多様な方法を駆使し、結果を得た。調査方法について判明したことは、学力調査などの結果だけを得ても、その結果にいたる因果関係を明確に確定することは困難であるということである。そのためには、個人史を追うようなナラティブが、個人の人生観、学習への意欲、態度を見極めるのに非常に大きな力をもっているということであった。

この方法は、客観性に問題があるとされているが、個々人の発達の因果関係を見極める上では不可欠のものであった。そのような意味で、ナラティブは、本研究を進め

る上で重要な役割をもつ。探究学習によって育まれる思考のパターンを見極める上でも重要な方法である。

2. 研究の目的

ナラティブは、語りのな方法一般をさしている。それは、教師の語り、子どもの語りなど参加主体による叙述や述懐の方法全般を含むものとして、近年多くの教育研究において使われるようになった。この方法は、主観的な意識の流れを抽出し、個人的経験のプロセスを因果関係図式として描くことを可能にするものと考えられている。指導案やアチーブメントテストなど、客観的と信じられている公式の記録とは異なり、それは個人の内面の思いや感情を記録したものとして考えられている。その利点は、語ることによって記録化されない人間の思いや意志や意欲の部分を開示し、そのような主観的な思いが個々人の学習成果に結びつくものであることを明らかにすることにある。

3. 研究の方法

本研究の手法は、実際の教室において子どもたちの書いた記録、そして実際の語った発言を重視する。学力調査、アンケート調査などは、普通の授業に関わって、行われている。大事なものは、子どもたちの主観的思いをどのように取り出すか、というその方法に関することである。個人史を追うようなナラティブな手法が、個人の人生観、学習への意欲、態度を見極めるに重要であった。

当初は、探究学習によって育まれる思考のパターンを見極めるためにコールバーグ流の6段階に依っていた。しかし、コールバーグの6段階尺度は実践的には困難があった。そこで、ハーバーマス流の妥当性要求5段階尺度を導入し、評定した。

4. 研究成果

研究は、実際の教育現場において、子どもの主観的思いをワークシートに記述させ、その主観的な吐露を記録し、その文章を構成主義的に再解釈することにより、その主観性を取り出すことから始めた。そして、その主観性の吐露の中に超越論的相互主観性がどのような形で隠されているかを再分析した。

一つの典型例を示そう。子どもたちは、道徳ジレンマ教材、「下北のサル」について、次のように書いている。

・どちらかを選ぶのは本当にむずかしい事だけれど、人生には『選ぶ力と勇気』を求められるときがすくなくならずあるのだと思います。どちらが正しいのか、どうすれば一番良かったのかは正直なところ分かりません。苦渋の決断をせまられた時、答えから逃げたくても逃げられない重大な局面に立ったときの気持ちを今回真剣に考えさせられました。たとえ問題が解決したとしても、大きな課題がずっしりと残っているのです。サルの死を無駄にしないためにも、私たちはこれから何が出来るのか考え、話し合っていく必要があると思います。

・だから、すごくむずかしいせんたくでした。いつも、こんなせんたくはしないので、とてもいいけいけんになりました。だから、これからも、このけいけんを生かしていきたいです。

・道徳は最初どんな授業なのか分かりませんでした。でも、授業をやっていくとどういう授業なのか分かってきました。道徳は人がやるのが正しいか 正しくないかを自分で考え、話し合い、自分の考えを変える授業なのです。ぼくは、話し合うことがとても好きです。話し合っただけの答えをちがう答えに変えるので楽しいからです。

・僕はこの道徳の授業はとてもむずかしい授業だと感じました。(略)この授業は、決

断する時の勉強になって、人生にかかわってくると思います。良い授業でした。

・今日の授業で初めて分かったことがありました。それは、「ちがう立場の人のこと」を考えるとすることは、とつてもかんたんそうに見えて、すごく むずかしいということです。

・道徳は、自分一人の事ではなく、色々な人の立場になって考えなければいけませんでした。この人にとっては、良い事だけど、こっちのではないと、色々な人の気持ちなどもあるので、一人が良いからという事で決めてはいけませんでした。色々な人の意見を聞き、この人はどう考えているのかなども 良く聞かなければいけませんでした。色々な人の立場の事を考え、色々な人の意見を聞き、整理してからこそ、本物の自分の意見と言えるのではないかと思います。そして、それから、自分の行く道を決めれば良いと思いました。

本事例の対象児童 33名。友達の意見によって意見が変わった児童 13名。友達の意見によって考えが深まった児童 16名。合計 29名。以上により、ほとんどの児童が話し合いにより、友達の意見を聞くことで、自分の意見を変えたり、深めたりしていることが分かる。友達の意見によって、発達段階が上がったか、または同じだった児童 28名、という結果が出ている。つまり、友達の意見を聞く中で、自ずと発達段階の高い意見を聞き入れていることが分かる。今回の授業を通して、(話し合いをすることで)道徳的発達段階があがったことがわかる。

発達段階のどの位置にある意見なのかを判定することは難しく、評価する教師によって、この数値は変わりえるということも感じている。しかし、そうだとは言え、友達の意見をよく聞き、自分の考えと照らし合わせる授業を行えば、児童の発達段階は

上がるということは、概ね言えるのではないかと思う。

以上の実践報告は、本研究が本来意図したものであり、典型的な成功例といえる。本研究では、小学校3教室、中学校2教室、高校2教室で実践を重ねており、現在その報告書を編集中である。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

Shigeru Asanuma “Reconstructing moral education in Japan: Habermas meets Lockwood,” 2016, 東京学芸大学紀要、総合教育科学系、67.1-8

大野俊一 「ハーバーマスの理論に基づく道徳教育の実践：ある教室での実践例「下北半島のサル」」2016、個性化教育研究、第7号、2-17

〔学会発表〕(計3件)

Shigeru Asanuma. Japanese Teachers' Struggle for Active Learning: 2015 International Consortium for Universities of Education in East Asia
November 1, 2015 at International Center in Nagoya

浅沼茂 相互理解のための道徳教育：モノローグからダイアローグへ日本教育方法学会 第51回大会、2015年10月10日 岩手大学教育学部

ASANUMA, Shigeru Japanese Teachers' Struggle for Active Learning: International Impact of PISA, IB, and Others. JUSTEC 2015. 27TH ANNUAL CONFERENCE. 2015 Meeting of Japan-United States Teacher Education Council. September 16, 2015, University of West Florida

〔図書〕(計1件)

浅沼茂、奈須正裕、カリキュラムと学習過程、放送大学教育振興会、2016年、250頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浅沼 茂 (ASANUMA, Shigeru)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：30184146

(2) 研究分担者

該当せず

(3) 連携研究者

古屋 恵太 (FURUYA, Keita)
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：50361738

遠座 知恵 (ENZA, Chie)

東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：20580864